

涼しくしたり、涼しきあらう、一定飛びに着たが
化がさいたりするだらうが。

卷之三

暑さを通り越して、急に涼しくしてや獸の
寒さを通り越しても育たない。だから長時間も
かけるところとなるべく短時間に寒さをこじら
えたり、暑さをこじらえたりして、またひどきのや
小麥のところ、実験ではやるが、どうも本当
やらないうが考えておきなさい。

「一年間の季節の大循環と相俟つ相應の充足をいために、六ヶ月間にわたる日照時間の長短の用意もあつたる」とは全く構想の大きさが扱ひでした。

嚴
一
七

四

に思ひを致します。思ひも到ひ生僻の壇に接する
と、その方の生活の嚴^{きび}しに、肅然と致します。
この度の先生の御教壇は、當にそれであります。
單純化とはこれであると示された、全く單純明瞭
なお取扱です。單純化の第一歩、「一」を捨てら
れたことです。示されればその通りです、「一」を切
り捨てられた時は敬意をしました。單純化の第二歩、「一」
を捨てられながら、全譜の概観をやめたります。
單純化の第三は、一時間目に、季節によって育つ
植物を二時間目には、季節と異なるようにして
育つ植物を扱われたことです。

あらうとして、かえでて人を分離する。——

植物は季節から何をも取つたが、
季節を温度で名づけると、

季節古間違わせ、植物をまごひでるところは、
など、子供もがたと一枚にがる間に難かしいのです。
たた一つの問題にてて、子供の眼の輝きが變るのです
から恐ろしいのです。文を見ると驚きを連れるが、
おじさんもうとするとどうやら生まれてくるものとは
なります。結局は、文を読みぬき、子供を窮屈
くとうから生まれてくるものなのです。

単純明瞭な骨格は、子供に分り易い道筋、参考方を用意され、より一層、子供の、単純明瞭に具体化されて、ます。しかも、どうどう、自習の種を残しがれるので、将来がますます単純明瞭に理会が深まることになります。先ず、季節についてよくほぐしてやると、次に植物

人といふから生まれてくるもののお父さん。
お父さんは、たゞ自習の手がかりにする
ように、よく教わせることは、至難な板札です。前に
述べたように日照時間の长短を、二時間目の終
りに出されたことをそつとさしつけよう。くわしくは、自分の
勉強が進むにつれて明らかになるとともに、それ以
かえで、将来の興味を倍加するともなります。
板書の練工夫もそれです。一時間目には、長い

なり易い季節を子供に分り易くまとめてあるから
李節と植物の關係がよく分かるのです。
一年間の季節を区分した後、李節と植物の
關係の部分に焦点をしほそおられます。これも子供
に分り易い道筋を用意された一つです。特に二種類の

無駄のついた文章が、板書にて予単純明瞭に整理されました。また、季節を円で示されたことは実に美しかったです。

思って読ませるが、私はどう読みても、板のままで見つけられません。

分り易いお扱いでした。特に二時間目は、矢張り季節を表わし、太陽の高地、昼夜の長短を添えられたことは思ひも致らぬものでした。ありますに種をもれば、理科の時間にも、大いに活用される事です。お取扱いの配分の妙は、何う難かしいとうかく余るで拝見するに止めました。

と共に、御教壇全体が、美しく整った姿とねえ

「読みさきたが。」

います。一時間目は、長文の概観と季節と植物の關係の一部を扱われてます。それで、單純化した流れです。ところが、二時間目の二点では、気温の高低、日照の強弱を具體化して説がれて、季節を作る方向を示されました。お諭しになりました。この頃感ずるのですが、子供二点でざりつと舞合が回った姿です。二時間の御教壇をぶりかえさせて、美しさを「新し本を頂いたら、ずっと前まで読む」といふのだと、勉強に対する覚悟をさせようと説がれ、季節を作ることを示されました。お諭しになりました。この時はめまい多くありました。もちろん、この態度を正しくなるのに、よくよくの時以外は、必ず、このようにさうと何気なく言つたのです。しかし、この際もさうです。何度か、こうした自然な想觀する感覚があります。御教壇の番りす。この際もさうです。何度か、こうした自然なのは、二点ともども、薄々くるものであります。お言葉が「み重ねて」きました。日頃、春毎に圓くじらを立て、力こぶさ入れて極め付けてある私は、深く反省させられました。

説明文のおもしろさ

杉田 すま

題目

季節

黒板の右端、余り上から下へ

着いた小さい字が出るから不思議です。今年は、

花束と、名も美しい東北の地で、西日本を

題目を

植物

書かれました。今回ばかりはオール題

と

中程近くに、このように並べて

書かれました。題目を手書きの一つとし

て、機械的に書くことへの大きな戒めである。

題目の右側に大きな円を一つ書かれま

した。この円の中に、春、夏、秋、冬と書かれました。この中に、季節が、二つの春なりた。

だんだん春の盛りへとほほ行く時など

あるが、どうやら、ほんとうにおもしろいなど

春の会は、参加者が比較的少ないのが常

です。金曜日をやしました。それが又、しょりとして落

着した小さい字が出るから不思議です。今年は、

花束と、名も美しい東北の地で、西日本を

題目を

植物

書かれました。今回ばかりはオール題

と

中程近くに、このように並べて

書かれました。題目を手書きの一つとし

て、機械的に書くことへの大きな戒めである。

題目の右側に大きな円を一つ書かれま

した。この中に、春、夏、秋、冬と書かれました。この中に、季節が、二つの春なりた。

だんだん春の盛りへとほほ行く時など

あるが、どうやら、ほんとうにおもしろいなど

植物について説明文でした。

最後の二行「季節と植物の關係は、放

ながちもい」と、うの結論です。子供の生活

で、そぞ深く関心を持った、そうち身の感

りのセイと季節と、どんなふうもしくは、關係が

あるのか。どうやら、ほんとうにおもしろいなど

「定石」

「お母さんは、春になつた、夏になつたと、こまみや
何が分るが、植物は季節が分るだうか。」

第一次の二、とくで、四つの季節をほりさせ、六
とくわれました。子供はしばらく考をました。
やあ、先輩のお言葉、分るの。植物は、

季節の移り変わりが分るのよ。だから、暖かくなると
間違ひ笑ひ花がさく。知らるからさくの。芽を
出すの。そしてすみさず、植物と季節の関
係が、一ととのどうちには書ってあるだか」と、
二に

か第二次の二、とくでは、大円の中の季節を、
焦点をしほられました。「一は春の變化のこと、
度は温度にあるはめ氣をした。そして、「この温度
が書くてあるだう。これは皆さんが自分で
読んだり、調べたりする部分ですよ」と学
習の大範囲をすこり分けおしまへにわくの中には、「夏暑いのが大好き、人間が暑くて
いたまうだ」と思っていると、ワード元気になら
たのーの文に、ちらちら目がうつるのと、こもある。秋涼いのが好きなのは涼しくなると
の文の核心がつかめなかつたのだと、私は、自分
の浅さに気づきました。

「六、とく」

植物は季節から何をもつたのか。温度、季節はすくに育るところがでるよう、何を
と、日光の強さ。それも、うんと高い温度が
ほしの、日光もう人と強いのがほしいのか。
何をあげよう、がこの問が、具體化へ導
かれるものなのだ。自分に都合のよい季節に
育つとは、こううことなのだと、私が改めて
悟らせて頂いたよりなものでした。

そして、植物の中には、高さをもらつたのも、
低いのももつたのもある」と、ちょっと補説され
ました。このひとつで、この文を一口に表わされ、そ
の後で「春の花だったり、秋から一足飛びに冬
をやめて春にしたら、花がさくだらうか。考をさら
つしゃ」と言われました。第二次の最後にも、
「小麦は実験しただけで、なぜ実施しなのが、考
えておきなさい」と時間の終り毎に、こうした
疑問を投げたのも、何か意味のあることを感じます。

「お母さんは、春になつた、夏になつたと、こまみや
何が分るが、植物は季節が分るだうか。」

第一次の二、とくで、四つの季節をほりさせ、六
とくでは、その季節から、植物は何をもつたのかと
やあ、先輩のお言葉、分るの。植物は、
季節の移り変わりが分るのよ。だから、暖かくなると
間違ひ笑ひ花がさく。知らるからさくの。芽を
出すの。そしてすみさず、植物と季節の関
係が、一ととのどうちには書ってあるだか」と、
二に

か第二次の二、とくでは、大円の中の季節を、
焦点をしほられました。「一は春の變化のこと、
度は温度にあるはめ氣をした。そして、「この温度
が書くてあるだう。これは皆さんが自分で
読んだり、調べたりする部分ですよ」と学
習の大範囲をすこり分けおしまへにわくの中には、「夏暑いのが大好き、人間が暑くて
いたまうだ」と思っていると、ワード元気になら
たのーの文に、ちらちら目がうつるのと、こもある。秋涼いのが好きなのは涼しくなると
の文の核心がつかめなかつたのだと、私は、自分
の浅さに気づきました。

「六、とく」

植物は季節から何をもつたのか。温度、季節はすくに育るところがでるよう、何を
と、日光の強さ。それも、うんと高い温度が
ほしの、日光もう人と強いのがほしいのか。
何をあげよう、がこの問が、具體化へ導
かれるものなのだ。自分に都合のよい季節に
育つとは、こううことなのだと、私が改めて
悟らせて頂いたよりのものでした。

そして、植物の中には、高さをもらつたのも、
低いのももつたのもある」と、ちょっと補説され
ました。このひとつで、この文を一口に表わされ、そ
の後で「春の花だったり、秋から一足飛びに冬
をやめて春にしたら、花がさくだらうか。考をさら
つしゃ」と言われました。第二次の最後にも、
「小麦は実験しただけで、なぜ実施しなのが、考
えておきなさい」と時間の終り毎に、こうした
疑問を投げたのも、何か意味のあることを感じます。

「お母さんは、春になつた、夏になつたと、こまみや
何が分るが、植物は季節が分るだうか。」

第一次の二、とくで、四つの季節をほりさせ、六
とくでは、その季節から、植物は何をもつたのかと
やあ、先輩のお言葉、分るの。植物は、
季節の移り変わりが分るのよ。だから、暖かくなると
間違ひ笑ひ花がさく。知らるからさくの。芽を
出すの。そしてすみさず、植物と季節の関
係が、一ととのどうちには書ってあるだか」と、
二に

か第二次の二、とくでは、大円の中の季節を、
焦点をしほられました。「一は春の變化のこと、
度は温度にあるはめ氣をした。そして、「この温度
が書くてあるだう。これは皆さんが自分で
読んだり、調べたりする部分ですよ」と学
習の大範囲をすこり分けおしまへにわくの中には、「夏暑いのが大好き、人間が暑くて
いたまうだ」と思っていると、ワード元気になら
たのーの文に、ちらちら目がうつるのと、こもある。秋涼いのが好きなのは涼しくなると
の文の核心がつかめなかつたのだと、私は、自分
の浅さに気づきました。

「六、とく」

植物は季節から何をもつたのか。温度、季節はすくに育るところがでるよう、何を
と、日光の強さ。それも、うんと高い温度が
ほしの、日光もう人と強いのがほしいのか。
何をあげよう、がこの問が、具體化へ導
かれるものなのだ。自分に都合のよい季節に
育つとは、こううことなのだと、私が改めて
悟らせて頂いたよりのものでした。

そして、植物の中には、高さをもらつたのも、
低いのももつたのもある」と、ちょっと補説され
ました。このひとつで、この文を一口に表わされ、そ
の後で「春の花だったり、秋から一足飛びに冬
をやめて春にしたら、花がさくだらうか。考をさら
つしゃ」と言われました。第二次の最後にも、
「小麦は実験しただけで、なぜ実施しなのが、考
えておきなさい」と時間の終り毎に、こうした
疑問を投げたのも、何か意味のあることを感じます。